
向日葵のように

高田龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

向日葵のように

【Nコード】

N5576F

【作者名】

高田龍

【あらすじ】

男は、五十を過ぎて妻と別れ、住まいを手放し、職も失う。再出発は現実には厳しい。学生時代からの友人の薦めで、選択肢には無かったバーの経営をすることを決める。すべてをカウントゼロにしての再出発は不安だらけだった。経験のない事に苦労も多かった。しかし、店に集まる客達との交流の中から、男は、それまで知らなかった世界を垣間見る。名もなき人々の織り成す人間模様は男に新鮮な刺激を与え、その人々との交流は、男が忘れていたものを呼び醒まし、再び生きる力を取り戻す。男の周りを、穏やかな時間が流

れて行く。そんなある日、男は自殺しようとしている若い女に遭遇する。そして、男の人生に新しいテーマが生まれる。

序

蝉時雨が騒がしい昼下がり。

二十年以上も連れ添った祥子は、信じられないほど呆気なく家を出て行った。

私は、蝉時雨の中、地上12階、3LDKの箱の中に取り残された。

私が部屋を引き払ったのは妻の祥子が出て行ってから三ヶ月程が経っていた。

予想以上に、時間がかかったのは、住まいの売却に手間取ったことや家財道具の処分に苦労した為だった。

気がつくと季節は、秋を通り越していた。街にはクリスマスキャロルが流れ、電飾に彩られた街路樹やショウウィンドウはこの季節ならではの、華やかさに溢れている。

マンションの売却で手にした金の大半を妻に送り、妻からは、署名捺印された離婚届が送られて来た。

私と祥子の20年は終わった。

二人に子供が居たら私達は同じ選択をしたのだろうか。

年が改まった。

私は滑り込みで、暮れのうちに新居に入ることが出来ていた。大学時代の友人、田中衛が経営する賃貸マンションのひとつだ。そのマンションは新宿区、と云っても市ヶ谷の閑静な高台に在り、8階建てで部屋数もさほど多くはない。1階は入居者の為の駐車場と美容室に喫茶店、来月に成ると日本蕎麦屋が開店するという。

景気も良い訳ではない時節からか、正月気分もそこそこに、世間は新しい年を進み出していた。松が明けたら就職活動を、と思ってい

た私は十日から心当たりの処を廻り始めたのだが、五十歳に成った身には、簡単に職が見付かる訳も無く、時間ばかりが過ぎて行った。暦は既に二月。

さすがの私も、焦り始めていた、職は未だ見つかっていない。

東京にしては量の多い雪が降った翌日の昼下がり、田中衛から携帯に連絡があり、これから会いたいのだが都合はどうかという問い合わせだった。無職の五十代、しかも昨夜来の大雪、都市の機能は著しく麻痺している。

こんな日に出掛ける用も無い、私は部屋で待つて居ると田中衛に伝え、携帯を切った。

30分程で田中はやってきた。

「元気そうだな、安心したよ」と言いながら日に焼けた顔に真っ白な歯が爽やかな田中は、真っ赤なアルパカのセーターにオフホワイトのコーデュロイのパンツといういで立ちで、玄関に立っていた。どれも高級なブランド物なのだろうが、着こなしが良いためだろうか、いかにもと云う処が無く彼のセンスの良さが光る。

私がこの部屋に越して来てから田中とは二度会っている筈だったが、いずれもこの部屋の入居にあたっての打ち合わせで、旧交を温めるといったようなゆつくりしたものでは無かった。

こんな天気の日田中は、わざわざ出向いて来ていったい何を話そうと云うのだろうか。

「コーヒー有るか？」と田中は、狭いリビングのソファに腰を降ろしながら尋ねる。

「インスタントなら有るけど」と私。

「構わんよ、一杯ご馳走してくれ」

「ちよつと待つてくれ」

私は、キッチンに立ちインスタントコーヒーを大きめのマグカップに入れ田中の前に置いた。

「インスタントでも、結構イケるな」田中はそんなことを独り言のように呟いてから、雪の中をわざわざやって来た理由を話しはじめた。

「おまえ学生の頃、ショットバーみたいな店をやりたいって言うたろ、そんな考え今も持ってるのか」

「そんなことを考えたこともあったな、それがどうかしたのか？」

「うん、実はな」田中は、マグカップを、ゆっくりとテーブルに置き、灰皿を自分の方へ引き寄せてから、タバコに火を着け、深く吸い込むと、

「おまえさえよければ、今住んでる処の一階でそんな感じの店、やってみないか」突然の提案に少なからず驚き、応えに困っていると、「いやいや、勿論資金は俺が出す、心配するな、だからって雇われ店長ではおまえもつまらんだろうから、月々の売上の中から返済して貰って……」

いろいろ例を挙げながら、田中は熱心に話しを続けている。私は、唯黙って彼の話を聞いていた。

「今更元の業界に戻るつもりも無いんだろ」

たしかに私には今までの業界に戻る気は無かった。

だからと云って、この歳に成っていったい何をすれば好いと云うのだろう。

田中の、時折身振り手ぶりを交えての話しを聞きながら、あらためて自らの将来が、けして楽なものではないという事を、感じていた。

窓の外がすっかり暗く為った頃、田中は帰って行った。

灰皿に山盛りの吸い殻を残して。

私は、田中の提案に乗ることにしよう、心に決めていた。
明日の朝には、田中に伝えよう。

私の人生のひとつの章が終わり、暫くの空白の後、新しい章が始まるうとしている。

窓の外の闇の中を冷たい風が吹き荒れ、窓を叩いている。
冬はまだ終わらない。

第一章 葉 桜

三月に為った。

朝晩はまだ冷え込むが、三月と聞いただけで春を感じるのは何故だろうか。

田中は、さすがに手慣れたもので、仕事は速かった。

二月の終には店内の図面は、平面図はもちろんのこと、詳細図から仕様書に至るまで調い、内装工事が始まった。

私の方も、慌ただしく動き出していた。

開店のための許可申請の手続きやら、従業員募集の為の告知の準備、そして面接。

食器類とインテリア洋品の選択と買い付け。小さな店でも、開店するとなるとあれやこれやと仕事は多い。

おまけに、私が未経験者という事も在ってか要領も悪く、スムーズに事は進まなかった。

これで、田中の後押しも無かったら、私は多分投げ出していただろう。

店は、四月の半ばに完成した。

保健所の許可がまだ下りていない為に営業は出来ないで居るが、それも後十日も経てば下りる筈だ。取引業者も田中の紹介で、酒屋から割り箸を扱う包装資材業者から、清掃業者まで、店を経営をする為に、付き合う必要が有る業者は、ざっと計算しても三十社を超える。

業界誌に出している募集広告の反応はいまひとつで、採用が決まった者は居なかった。

私の予定では、厨房を任せる人間が一名、その補佐役が一名。カウンターの下のバーテンダーが一名、女子スタッフが数名、女子スタッフの場合パートタイムが主流に成るため、カウンターの中には二人居れば充分なのだが、交代で働いてもらう都合上多めに募集をしておく必要があった。

店は、玄関ドアに対して細長く奥へ伸びている、いわゆる『ウナギの寝床』型で、カウンターには九人の客が腰掛けることが出来、後ろの壁一面を使ったボトル棚はかなり余裕を持って造って在り、後ろは鏡張りなので、いろいろなボトルで埋め尽くされ、設えた照明に灯が入った時には、さぞかし壮観なことだろう。

反対側の壁に沿ってボックス席が四席それぞれ四人掛けである。全体的には青を基調にしてあり、所々壁にはアクセントとに漆喰の欠き落としを用い、その他の壁材は粗い布目の白んだ青、日の出前の蒼白感を出したかったのだ。

店の屋号は、あれこれ迷った揚句、『凧』（なぎ）に決めた。

意味は特に無い、と言ったら無責任な話だが、穏やかな海、静かな海の底のような空間の店を、という以外、さしたる意味が有る訳ではなかったのだ。

四月も後半に為ってから、途絶えていた応募の問い合わせが相次いだ。

調理師の資格を持つ人間と立て続けに六人面接したが、それぞれ一長一短決まった者は居ない。

自分の優柔不断にも些か嫌気がさしていた。

ゴールデンウィークが始まった初夏を思わせる日の午後、部屋を出て一階の店へ行こうと、エレベーターを待っていた私の携帯が鳴った。

電話の相手は田中だった。

「朗報だぞ」と田中。

「どんな？」

「古い付き合いのレストランのオーナーから今連絡があつて、腕の良いコックが居るらしいんだが、会つて見ないか、この男なら推薦出来るって先方は言ってるんだ」

腕の良いコックが職を捜している、何か有るのだろうとは思つたが、こちらも時間に余裕が有る訳ではない、私は田中に早急に遭わせてもらいたい旨を伝え、携帯を閉じた。

店のカウンターに腰掛け新聞に眼を通してしていると、再び携帯が鳴る。相手は勿論田中だった。

「早急に、つて言うから、先方に連絡着けて貰つたら、こつちさえ都合が付くならこれから伺うと言ってるらしいが、おまえの都合どうだ」

私は、差し支えないと、田中に伝えた。

その日の夕方、片桐繁はやつて来た。

型通りの挨拶を交わした後、作業用の照明で明るく為っている店の隅のボックスで面接を始めた。

歳は三十八で今は独身だと云う。今はと云うからには過去には結婚を経験しているという事だろう。

彼は、中々の男前で背も高い。

清潔感と育ちの良さが匂い立つ彼の佇まいが気に入った。たえず

それより、彼が今まで面接した人間達と決定的に違っていたのは、自分の過去の経歴を饒舌に語らないことだった。

私の質問に対して、にこやかに、そして簡潔に彼は答える。

いろいろな形容詞や、手前みその輝かしいエピソードは何ひとつ彼の口からは聞かれなかった。

どこそこの店の経営危機を自分が回避し、著しく業績を上げたとか、老舗ホテルの料理長として腕を振るう筈だったが、政治的なポジション争いを、姑息な手段を使って仕掛けてくる後輩に譲り、部下や

経営者が引き止めるのを振り切り、惜しまれながら辞職したの何のと、異口同音にドラマのシナリオのような話を聞かされて来たが、彼、片桐繁の話には、そのような自慢げな話は微塵も出ては来なかった。神奈川県の高校を卒業し、調理師の資格を取得するために、専門学校に二年間。その後は、都内のホテルのレストランに就職、三年で退職した後、ヨーロッパに渡り、五年間イタリア、フランスで修行を積み、三十歳迄の二年間はアメリカで過ごし、ニューヨークとロサンゼルスで働いている。

「料理をアメリカで勉強しようとは思いませんでした、ある程度のモノはそれ迄の五年間で学びましたから……」

片桐繁はそう言うてから、少し話に間を置いた。

私は黙って彼の次の言葉を待っていた。

「有名なホテルの料理長に成りたかった訳じゃあ李ませんでしたから、自分の店を持つと云うのが私の夢でした。ですからアメリカへは店のインテリアや、新しいレストランのスタイルを学びたくて行っていました」人懐こい笑顔の中に、しっかりとした意志が感じられた。

「それで、その夢は叶ったんですか？」その私の質問に、一瞬だけ片桐繁の笑みが消えたように見えた。

少しだけ間を空けてから

「そうですねえ、どうなんでしょうが、叶ったような叶わ無かったような」

片桐繁は、その穏やかな表情からは考えられない、それ以上私が立ち入る事を許さない強い意志を見せた。

私は話題を変えた。

一時間近くの長い面接為ってしまった。厨房を、彼に見て貰った後、私は彼に働いてもらいたいと伝え、片桐繁は宜しくお願いしますと言って頭を下げた。

店の前の通を、行き交う人達の中に混ざるように帰って行く彼の後

る姿を私は何時までも見ていた。

その時、髪の高い女が私の視界から片桐繁の姿を遮った。おさえぎ

若い女だったが、何か体調でも悪いのかフラフラとした脚取りで調度、片桐繁の後を追う格好で歩いて行く。

少し気には為ったが、彼の採用を決めた昂揚感の為に、その女の事は、直ぐに私の意識の外に行ってしまった。

彼ならやってくれると、私は確信した。

私の店は、開店に向かって大きく前進した。

狩場早苗は、今自分が何処にいて、何処へ向かって歩いているのが解って居なかった。

ただ両足が、自分の意志とは別に交互に前にでているのだ。

心はずたずたに引き裂かれたような感じがして、涙が拭っても拭っても、後から溢れ出て来るのだった。

なのに、彼女にはその苦しく悲しい原因が何なのか、どうしても思いつくことが出来ないのだ。

下腹に、不快な鈍い痛みが在り、時折その痛みは強くなり、その度に早苗は歩を止めてその場にうずくまりそうになる。

早苗が何度目かに立ち止まった時だった。

二人の男が建物から出て来て、何やら話している。

痛みと闘う早苗には、その内容迄は理解出来無かったが、若い方の男が、もう一人に一礼し、歩きだそうとして自分とぶつかりそうに為った。

男は、慌てた様子で早苗の方を見てから、

「あッ、済みません！大丈夫ですか？」と声をかけてから、歩きはじめた。

早苗も、歩き出していた。意識が朦朧もろろとして来るのを必死で堪えながら、早苗は歩く。

自分には抱えきれない、絶望感の中で、彼女の心のセキュリティが

働き、記憶の一部が喪失したのだ。

やがて、道路の先が商店街に為っている場所迄来ると、早苗の意識は遠退き、彼女はその場に倒れた。

葉桜が、春の終わるのを告げる午後、夕暮れが西の空から近づいていた。

第二章夜風に隠れて

狩場早苗が気が付いたのは商店街の入口で彼女が意識をなくして倒れてから15時間以上が過ぎた翌朝のことだった。

朝の検温に廻って来た看護師が彼女の変化にいち早く気がつき声をかける。

「狩場さん、聞こえますかあ」

早苗は小さく頷いた。若い看護師は、早苗が頷いた事を見ると、手早く体温を測り、血圧を測り、足早に病室を出て行った。

直ぐに、小肥りの医師がやって来て早苗に声をかける。

今度は

「はい」と、早苗は小さな声で答えた。

彼女に何が有ったのかはともかく彼女が、危険な状態を回避したことは確かだった。

一週間が過ぎた。

早苗の容態がだいぶ快方に向かつて来た頃、それを待っていた警察から、二人の刑事がやって来た。

早苗の居る病室の、開け放たれた窓から、五月の心地良い風が、薄手のカーテンをなびかせながら、病室いっぱいに入り込んでいた。

「この度は本当に大変な目に遭われましたなあ、大分元気に為られたと伺まして、安心致しました。」あきらかに先輩と見える方の刑事が見舞いの言葉を口にする、それを合図にでもするかのように、若い刑事が質問し始めた。

「狩場さん、貴女が此処に入院なさっている間に、容疑者は逮捕されました、否認はしてますが……」

「嫌な事を思い出して頂かなくては為りませんが、事件を解決する為です、ご協力お願いいたします。」

窓の外に視線を向けながら早苗は小さく頷いた。

早苗の長い髪に風が当たり、白い横顔に幾筋もの髪が貼り付いて、儚い美しさを醸し出している。

その美しさが、かえって痛ましさを増している。 その横顔

を眺めながら、二人の刑事事は、改めて拘置所の中で、容疑を否認し続ける男に対しての怒りが込み上げて来るのだった。

狩場早苗は、湘南の開業医の家に生まれ、何不自由無い環境に育った。

私立の幼稚園、小学校、中学校と進み、高校も都内の名門大学の附属女子高を首席で卒業した。

そして大学へ進学、それまでの半生で何一つ不幸な事など経験した事の無い早苗に、突然の不幸が襲い掛かったのは、早苗が大学二年の夏だった。

都内のホテルで行われた医師仲間の息子の婚礼に招かれた早苗の両親は、車での帰路、突然センターラインを大きくはみ出してきた対向車の大型トラックと正面衝突、両親と運転していた兄の宣彦の三人は即死だった。

事故は、大型トラックを運転していた四十代の男の居眠りが原因だったという。

この悲しい出来事は早苗の幸福だった過去とこれから進む未来との境界線に為った。

明るく快活だった早苗の美しい顔から、微笑みが消えた。

一瞬にして、父と母、そして兄を失った狩場早苗は、父親の弟、早苗にとって叔父にあたる、狩場直治の家に身を寄せる事になった。

狩場直治は、都内に在る大学病院で脳神経外科の部長の要職に在った。

彼には子が無く、世田谷の家は妻の佳代子との二人暮らしには広すぎた。

二人は、早苗を引き取ることに、何の異存も無く、むしろ悲しすぎるきっかけとは言っても、早苗を引き取ること自体は、喜ばしい事だった。

狩場直治夫妻のもとで、早苗は少しずつ心の傷を癒して行つた。

いつの頃か、周囲の人達を優しい気持ちにさせてしまうあの笑顔も取り戻していた。

狩場早苗を中心にした小さな世界は新しい形を形成しながら、静かな平和を取り戻し、流れて行く。

三年が過ぎた

狩場早苗は、美しい女性に成長していた。

四月に大学を卒業し、外資系の大手商社の秘書課に就職した年の夏、狩場早苗は、恋をした。相手は同じ職場の三歳上の青年だった。

早苗に、幸福な季節がやって来た。

そして、更に六ヶ月、早苗は青年を叔父夫妻に紹介し、青年の両親に、息子が結婚したい女性として紹介された。

両親と兄の突然の死がもたらした陰りは、すっかり消えて、早苗の美しさは、まばゆいばかりに輝きを増していた。

その美しさが、新たな不幸を呼び込んでしまう事など、早苗は勿論、誰が予想しただろう。

しかし、不幸はやって来た、それも突然に。

緊急の取締役会議が開かれる事になり、その為の資料をまとめなくてはならない早苗は秘書課の同僚と残業する事になった。

仕事が済み、早苗が二〇階の副社長室の机の引き出しに翌朝の取締役

役会議用の資料のファイルを置き、正面玄関横の社員通用口を出たのは午後九時を過ぎていた。早苗は携帯電話から家に連絡をして、残業が今終わり、これから帰宅する事と、疲れてしまったので、タクシーで帰ることも伝えた。この時間帯である、一〇時には家に着けるだろうと思い、タクシー乗り場まで急ぎ足で向かう。

会社の直ぐ近くに在るタクシー乗り場には二〇台近くが客待ちをしていた。

早苗が先頭のタクシーに近づくと、後部座席のドアが開き、早苗は滑り込む様に乗り込み、車は走り出す。

行き先を告げ、身体を、シートに預けた早苗は、まぶた瞼を閉じた。

そして思い出したように、運転手に、疲れているので眠ってしまうかも知れないから、行き先の近くに着いたら、声を掛けてほしい旨を伝えもう一度、瞼を閉じた。

少しだけ下げた窓の隙間から入って来る夜風が心地良く、間もなく早苗は眠りについた。

春の終ろうとする夜、入れ代わるように夏が近づいて、その夜の中を早苗を乗せたタクシーは走っている。

第三章 闇に潜む恐怖

野中晴夫は朝から神経がたかぶっていた。

茨城県の農家の次男に生まれ、ごく普通の少年時代を過ごし、高校は県立の農業高校に入学した。

だからと言って、特別農業に興味があった訳ではなく、世間体を考えて高校くらいは出ておくようにという両親の思惑だった。

入学して二ヶ月くらいは、真面目に通学していたようだが、その後は遅刻、早退を繰り返し、無断欠席もしばしばという状態だった。もちろん成績は良い訳もなく、担任の教師を始め学校側の配慮で何とか進級は出来たが、野中は高校二年の夏休みに、ある事件を起こしてしまう。

彼が起こした事件。

それは同じ高校に通う三年生の女子生徒に対しての痴漢行為だった。

相手側が告訴しなかった為に、警察沙汰には為らなかったが野中は退学処分になる。

地方の町のこと噂が広まるのは速い。

野中晴夫は故郷を追われる様にして東京へ向かう。最初の就職先だった土木工事の会社を辞めた後は、様々な会社を些細な理由で辞めている。

忘れた頃に、実家に連絡をしてきている為に、行方不明と云うことには為らないのだろうが、両親も彼が何処に住み、何をして暮らしているのかが判らなく為って、三年以上が経つ。

もつとも、電話の連絡は金の相談ばかりなので、まともな生活を送っていない事は容易に想像がついた。

実際のところ、野中晴夫は故郷を後にしてから今日まで、光の届かない世界の隠花植物のように都会の片隅を転々としながら生きてい

た、その間に幾つもの罪を犯し、発覚していないものを含めて、三人の女性を殺害し六人を強姦し、他に二件の未遂に終わった犯行も有った。

未遂に終わった二人を含む八人の被害者からは、告訴はされていない。

三人の殺人については、一件を除いては被害者の遺体が発見されていない為に、事件にすら為っていない。発覚している一件にしても、足立区内の河川敷で身元不明の女の腐乱死体が発見され、司法解剖の結果、体内から男の体液が検出されたと云うだけで、その体液が誰の物が特定される訳も無く、事件はやがて慌ただしく過ぎて行く都会の流れの中に飲み込まれて行った。

野中晴夫の中で、自分が犯罪者だと云う意識は次第に薄れ、反対に自分は捕まることは無いんだという根拠の無い確信が生まれた。

その野中晴夫は、空腹と抑え切れない情欲を持て余していた。

「腹減った…」

力無く野中は呟く、

二日前にパンを食べてから水以外は口にしていない。飢えは性欲を減退させるものなのか定かではないが、少なくとも、野中の場合は違っていた。

長い五月の昼間が西の空から暮れて行き、朱ね色の夕焼け空は、裾の辺りから、紫色に変わり始めて夜がやって来た。

その数時間後、狩場早苗は疲労に背中を押されるように眠りの底に引き込まれていた。

「お客さん、お客さん！」

運転手の声で、早苗の眠りは破られた。

「お客さんの言ってた三丁目は此処らへんだと思うんだけど…」

タクシーが停まった場所は早苗の家から通り一本南側だった。

家までは歩いても三分とは掛からない近さだ。

「ああ此処で結構です、此処で降ります。」

運転手は、家の前まで車を着けると言ったが、早苗は料金を支払いタクシーを降りた。

タクシーが走り去ると、街路灯の辺りを除いて、漆黒の闇が拡がる。車の流れはもちろん、人の歩く姿も無い。夜風の心地良さに誘われて早苗は、家の裏手に当たる通りを歩きはじめた。

点滅信号の赤が明滅している十字路までは50～60メートルだろうが、そこを右折して一本目をまた右折すれば、すぐに狩場の家の門が見えて来る。早苗の足の運びは、少し速まり、十字路を右に折れ建物の塀が高く巡らされた通りのガードレールとの間の狭い歩道を歩く。

人ひとりが歩けるだけのスペースですれ違ふことすら容易には出来ない、その時だった。

早苗の家の在る通りの方から人影が現れ、こちらへ歩いて来る。

夜遅いとはいえ住宅街のこと、人が歩いて居ても不思議ではないのだが、早苗はその人影に少し怯えていた。

男性だというのはわかっていた。

直ぐ前に人影が迫った時、早苗は歩を止めて相手をやり過ごそうとした、嫌な予感が頭の隅の方に燈り、直ぐに消えた。

男は、早苗の横をすり抜ける様に通る過ぎる。

汗の煮詰まった^す饅^すえた臭いが、鼻腔を突く。

今、早苗の横を通り過ぎようとする男の、伸ばし放題の髪といい、吐息といい、身体全体から発散する悪臭が早苗に嫌悪と恐怖を呼び起こした。

「たまらねえ……」

確かに早苗は男が呟く声を聴いた。

早苗の首に男の腕が絡みつき、早苗は身動きがとれない、突然襲い掛かって恐怖に、叫び声をあげることすら出来ないでいる。

閑静な住宅街の夜。

狩場早苗の身に起こっている恐ろしい出来事に気づいている者は居ない。

第四章 五月の夜の悪夢

狩場早苗が、野中晴夫に襲われ連れ去られたのは、自宅から眼と鼻の先の場所だった。

しかし、早苗の身に起きた出来事を目撃した者は居ない。

野中は、二日前に池袋で盗んだ小型車に早苗を押し込むとその場を立ち去った。

早苗の恐怖心は頂点に達し、反対に野中の心は、それまでの彼の人生で出会った事の無い美しい獲物を捕らえた昂揚感に満たされていた。

早苗の震えが伝わって来る、肌に触れても居ないのに。多摩川の河川敷に車を止め、野中は後部座席で意識を失っている早苗を眺めていた。

柔らかい素材のブラウスの胸の部分が隆起を繰り返して居る。

この美しい獲物に己の欲望を吐き出す事を想像するとき、身体の一みに淫蕩な血液が集中していく。

野中はゆっくりと早苗の胸に手を近づける。

春物のジャケットの前を払げると、ブラウス越しにも、胸のふくよかさが伝わってくる。

ゆっくり揉みしだく野中。突き上がって来る情欲を抑え切れなくなった野中は、一気にブラウスの胸元を引き裂いた。

闇の中で早苗の豊かな乳房は白く輝いている。

野中晴夫は、解き放たれた野獣と成って意識を失っている早苗に襲い掛かり情欲の限りを尽くしたのだった。

東の空が明るくなる頃までに、野中はいったい何度早苗を犯したのだろうか。

狭い車内に、野中の吐き出した不快な匂いが充満している。それに混じるように早苗の傷つけられた身体の一部から発している血の匂いが漂っていた。

早苗は、自分の身に起きた出来事を少しづつ、理解していた。

意識がハッキリしてくるにしたがって、身体のおちこちが激しい痛みを脳に伝えてくる、そして絶望的な恐怖と悲しみが身体の奥から溢れ出てくるのだった。

身体が鉛の様に重い。

直ぐ傍に人間が居ることは、暫く前から判っていた。早苗は、横向きの姿勢で座席に身体を沈めていたが、殆ど全裸に近い状態だった。自分の後ろで眠っているのが男性で、その男に自分が犯されたことは、ハッキリしている。

僅かに残っている気力を振り絞り、静かにゆっくりと寝返りを打つ様にして、後ろを見る。

身体を動かすとおちこちが激しく痛む。

男は熟睡している。

痩せ型で、車内に居るためにハッキリとはしないが背の高い方ではないようだ。肉の削げ落ちた頬、厚い唇がだらし無く開かれ、口元から涎れが垂れている。

自分が、この男に弄もてあそばれ、汚されたのかと思うと、怒りと悲しみの入り混じった感情が込み上げて来て、早苗は声を殺して泣いた。

涙は後から後から、溢れ出てくる、これが夢であればと早苗は思ったが、これは、どうしようもない現実だった。その後も早苗の身に

襲い掛かった恐怖と屈辱は早苗の身体を汚し続け心を砕いた。男は、眠りから覚めると早苗を犯し、まただらし無く眠り、目覚めればまた、早苗を犯した。

狩場早苗は、地獄の底で心を失っていた。

第五章 闇の底（前書き）

忙しく平穩に過ぎ行く日常に潜む恐怖に搦め捕られてしまった早苗に明日は来るのだろうか。

第五章 闇の底

狩場の家で、早苗が帰宅していないことが判ったのは翌朝になつてからだつた。

運悪く、夕方から義父の直治の来客が在り、夜遅くまで酒宴が続ぎ、早苗が帰宅前に携帯から入れた連絡も、義母の佳代子は接客に慌ただしいさなかで、早苗の話を聞くだけで電話を切つた。

早苗の秘書と云う仕事柄もあつて、佳代子は別段気にも留めなかつた。

来客が帰つたのは、午前零時を少し回つた頃、佳代子は玄関先で来客達を見送つた時に、10年前にスイスで買つたアンティークの柱時計に眼をやり、たしか早苗は会社を出る時に電話をくれたはず、それも9時頃だつた、30〜40分もあれば……とは思つたが、あまり得意とは云えない酒を付き合わされて酔いが回っていたせいもあり、客を帰した後、かなりの疲れを感じ、はやばやと二階の寝室上がつてしまつた。

直治の方もかなりの酒量だつた為に応接間のソファに横になると、そのまま酈いひきをかいて眠つてしまい、住み込みの家政婦の駒井佐和子が毛布を掛けて応接間の電気を消した。

誰も、狩場早苗の身に起こつた事など夢想だにしなかつた。

翌朝午前6時30分、家政婦の駒井佐和子が自分の部屋を出て朝刊を取りに行く。玄関を開け、芝生の中を仕切るように黒御影石が一人が歩ける丁度好い幅で敷き詰めて在り、朝露に濡れて打ち水をした様に朝日を受けて光つている。その上を履き馴れたサンダルの音を立てながら門扉の処に在る新聞受けに向かう。

空はまさに五月晴れだった。

朝日が眩しい。

朝早いからだが、空気は冷たい。

きつと今日も暑くなるだろう、などと独り思いながら、五社分の朝刊を抱えて家の中に戻る。

雨戸を開け、キッチンに行き昨夜の食器を洗い、朝食の仕度に取り掛かるいつもの日課だ。キッチンの隅に置かれた小型の液晶テレビの画面表示が7:30に成って初めて駒井佐和子は、いつもと違う変化に気付く。

早苗が部屋から出て来ない、この時間には一階奥の早苗の部屋のドアが開いて佐和子さんおはようございますと言いながら、ダイニング・ルームにやって来て弾けるような笑顔を向けてくれる。

判で押したような狩場の家の朝の風景である。

それが、今日は無い。小さな胸騒ぎを感じて、佐和子は廊下を小走りに早苗の部屋のドアの前に、そしてノック。

中から返事はない。

もう一度ノックするが、やはり返事はない。

ドアノブに手を掛け押してみる。

ドアは静かに部屋の中に向かって開いて行く。

佐和子はドアに引つ張られる様に部屋の中に、庭に面した窓のカーテンは閉ざされたままで、暗い部屋の中に早苗の姿はない。

早苗は無断外泊などした事はない。佐和子の小さな胸騒ぎは一気に膨れ上がり、二階に向かう。

佳代子の寝室の前で声を掛ける。

『あゝ奥様、奥様』

既に目覚めていたのだろう佳代子は寝間着も着替えていて、佐和子の唯ならぬ気配を感じてか直ぐにドアを開けて出て来た。

『佐和子さん、どうかしたの』

『はい、それが早苗お嬢様がお帰りに成ってらっしゃらないんです』

『あら、変ね、たしか昨夜は9時頃に電話をくれて、私も忙しくしてたものだから詳しいことは聞いてないんだけど、遅くても、10時前には帰ってる筈よ』

『いえそれが、お部屋にはいらつしやいませんし…帰られた様子が在りません』『会社の、何か、急な用とかで…』

佳代子は自分の言っている事が有り得ないことだと判っていた。

『警察に届けたほうが、よろしいのでは…』

家政婦の駒井佐和子は、言いづらそうに佳代子の気持ちを探しながら切り出した。

『そうねエ、そうしましょう』

一瞬の沈黙の後、佳代子は意を決して階下へと、階段を降りはじめた。

応接間で眠ってしまった夫の直治を起こすと、簡潔に昨夜来の出来事を説明し、応接間の電話から警察に連絡をした。

佳代子の迅速な行動は、いつもの穏やかな、どちらかと云えばおっとりとした令夫人の様相とは打って変わって、佐和子の目を見張らせた。

若き日より狩場の家に嫁いだ後も暫くの間、大病院の筆頭看護師長として活躍して来た彼女の数え切れないであろう修羅場を踏んできた経験の為せる技だった。

警察に連絡を済ませると、続いて早苗の会社への連絡、婚約者の佐藤雅之の職場は早苗と同じ会社だったが佳代子は一度電話を切つてから、改めて個人の携帯に連絡を入れた。

佳代子から事の次第を聞かされた婚約者の佐藤雅之は『えっ』と言ったきり暫くの間、沈黙してしまった。

『とにかく、仕事を片付け次第そちらに行きます』緊張気味の声で佳代子にそう伝えると電話を切った。

地元の警察署から私服の刑事がやって来たのは、佳代子が警察に通報してから30分程経った頃だった。

早苗の失踪が、勿論この時点では失踪かどうか結論付けられては

いなかったのだが、誘拐事件を扱う特別なチームは動かなかった様だ。

何かの事件に巻き込まれた可能性は捨て切れないものの、今の段階ではどちらとも、といった処か。

狩場夫妻は応接間で二人の私服刑事に事情を聞かれていた。

直治の方は事情がやっと飲み込めたと言った様子だったが、子の無い狩場夫妻にとって実の娘以上とも云える早苗が居なくなった事は大変なことであり気丈に振る舞う佳代子の表情にも、悲しみと苦悩の色がハッキリと浮かんでいた。

午後になっても、早苗から連絡はなかったし、誘拐犯とおぼしき人間からの連絡も無かった。誘拐事件の可能性が残っている為に、既に報道規制が敷かれていた。

近隣住人もまだ早苗が事件に巻き込まれたらしい事を知る者は居ない。

狩場の家の中の空気だけが鉛のように家族にのしかかり、纏わり付くのだった。

婚約者の佐藤雅之は午後になってから狩場邸に到着し、狩場夫妻に挨拶をしたのだが、この状況下での挨拶など経験が有る訳もなく、どこかぎこちない挨拶は言葉も少なく、雅之は早々に刑事達の居る応接間に向かい、簡単な事情聴取を受けていた。

警察も婚約者の佐藤が早苗の失踪に関与しているとは思っている訳ではなかったが、早苗の失踪の理由や原因が、まったく判らない状況なので、手当たり次第にでも関係者から話を聴き、糸口を見つけようとするしか方法がなかった。

夕方近くに成って動きが有った。

狩場邸の裏側に面した通りで、女性物のハンカチを拾った近所の住人が居たことが判明したのだ。

その住人は、狩場邸の近くに住んでいる並木絹枝と云う65歳になる主婦で日課にしている犬の散歩の最中にいつも通る狩場邸の裏手でそのハンカチを拾い、そこから5分程の所に在る交番へ届けようとしたが、まだ朝が早かった為に、買い物の際にでも持って行けばいいと思い直し、自宅へ持ち帰っていた。

昼近くに来客があり買い物に行けなくなってしまったが、たまたま聴き込みに廻つて来た交番の巡査にハンカチを拾ったことを話し、それを手渡したのである。

並木絹枝がハンカチを拾ったのは午前5時だった。

狩場夫妻の許へそのハンカチが届けられた。

遺留品を入れるビニールの袋に収まったレースで飾られた白の女物のハンカチを刑事から見せられた夫妻は、それが早苗の物かどうかの、判断に困っていた。

その時、婚約者の佐藤雅之が、『刑事サン、それ間違いなく彼女のハンカチだと思います。』

『確かですか？』

『ええ、確かです。』

佐藤雅之は、そのハンカチが何故、早苗の物だと云えるのかを手短かに説明した。

まず、このハンカチに染み込ませて有るコロンの匂いが、早苗がいつも使っていた物と同じだという事。

このハンカチはイタリア製であるが、レースの部分のデザインがまったく同じイタリア製のハンカチを、プレゼントした事が有るが、何処にでも売っているような品物では無いし、この家の近くでということもあるし、早苗の物で無い方が不自然だと思う、と云うこと

だった。

刑事達も、雅之の話はもつともだと思ったが、科学的裏付けを取るために、このハンカチを鑑識に廻すことになった。

『刑事サン、彼女はもう……』『まあまあ、まだ誘拐されたと決まった訳じゃ無いですから、お気持ちは判りますが、あまりネガティブに為らないように。』

『ええ……判ってます。』『雅之の声に力はない。』

翌年には結婚が決まっている相手が突然いなくなってしまったのだから、穏やかで居られるわけもない。

初夏を思わせる一日が終わろうとしている。

早苗の消息は依然、判らないままだった。早苗には、タクシーを降りたあの夜から今迄に、何日が過ぎ、今が何時なのかとも判らなくなっていた。

見ず知らずの男に拉致されて、車に押し込まれ、あちこち連れ回された揚げ句に何度も何度も犯され、恐怖と屈辱に踏みにじられ抵抗する気力も失せてしまった。

早苗は、薄汚れた天井を眺めていた。

手と脚をガムテープで縛られている。

何も無い部屋の壁際に薄い夜具が敷かれ、早苗はそこに全裸のまま転がされている。

男は、30分程前に早苗の中に果てた後、手脚を縛りながら食料を買いに行く馬鹿な真似はしないで待っていると言い残し、早苗のバッグから財布を抜き取り、部屋を出て行った。

もう早苗には逃げる気力も、怒りも、悲しみも、一切の感情が消えていた。

涙も涸れてしまったのか、瞳を濡らすことも無い。

汚れたシーツに包まり、壁際に寝返ると眼を閉じた。

眠ろう、それがいい、そして眼が覚めた時には、見慣れた自分の部屋の天井が見えるかもしれない、今日迄のこの忌まわしい出来事がすべて悪夢で、いつもの日常がリセットされて…いや、きっとそう
だ。

眠ろう。

眠れば…いい。

早苗は、吸い込まれるように、深い闇の底に落ちて行った。

第六章 赤き明滅の向こう側（前書き）

生きる為に、絶望の谷底から早苗の反転の第一歩が踏み出される。

第六章 赤き明滅の向こう側

狩場早苗が、目を覚ました時、部屋の中に男は戻っていなかった。

替わりに遅い夕闇が、この獣の巢のような部屋に入り込んでいた。

「寒い」

早苗は全裸である、五月の終わり、初夏とは云え、夕暮れ時の部屋の中は、裸でも平気と云う訳にはいかない。

「あの男、何故戻って来ないんだろう」

今までも、早苗の手足を縛り上げてから、外出することは何度もあったが、30分くらいで必ず帰って来ている。はつきりした時間は判らないが、男が出て行ったのは昼前の筈である、おそらく今は、午後六時ぐらいだろう。

男の身に何か有ったのだろうか？

「寒い」

早苗は、すっかり暗く為ってしまった部屋の中で、身体を起こした。

取り敢えず、このガムテープを外そう、身体の自由を取り戻しておこう、あの男が戻って来て騒いだとしても構うものか、それにもし戻って来なかったら、このままではまずい。そう思うと、思考力が戻って来た。

一時間程も掛かったろうか、ガムテープは外れた。

手首をグルグル巻にしてあるテープを剥がす事に早苗はかなり手間取ったが、手の自由を取り戻せば、足の方は簡単だった。

早苗は部屋の隅に脱ぎ散らかしてある下着や衣服を身につけ、此処を逃げ出す為にはどうするかを考えた。

突然の恐怖と絶望に見舞われ茫然自失と為っていた早苗は、このガムテープを剥がすことに熱中する間に、不思議にも普段の自分を取り戻していた。

早苗のバッグも部屋に有ったが、その中に、今の彼女が、一番必要とする携帯電話は、やはり無かった。

不思議だったのは、財布が有ったことだ、中の現金も残っている。

野中晴夫は、僅かな所持金を使い切り、無一文に成っていた時に早苗に遭遇したのだった、それからは早苗の財布の現金を便りにこの数日を過ごしていた。金が必要になると、野中は早苗の財布から必要な分だけ抜き取り、財布はバッグに戻していた。

何故そうしていたか、その心理は解らないが、野中は財布を取り上げる事はしなかった。

「人に死ぬより辛い苦しみを与えておいて、財布の金は、全部は盗らない。」

だから自分は、そんなに悪人では無いとでも言いたいのか、
そう思うと、早苗の心に、怒りが込み上げて来た。

私のなにもかもを奪い、踏みにじり、それでもどこかで許されたいという思いを持っているのかも知れない男のズルさが堪らなく腹立たしく、『許さない！』

いつの間にかすっかり暗く為ってしまった部屋の中で、早苗は叫んでいた。

開く訳が無いと解っていた玄関のドアは、やはり開かなかった。

外側から鍵がかかっていた。

窓も全部ベニヤ板を使って目張りがしてあるし、たった一力所だけ、それが無いトイレの小窓は小さすぎて、そこからは、到底逃げるこ

となど出来るものではなかった。

早苗は、部屋の電灯を点けた。

改めて見渡してみると、ここは汚いだけでなく人が住んでいる事が信じられないほど、何も無い部屋だった。

早苗は狭い部屋をせわしなく動き回って、逃げ出すための手立てを探し出そうとしたが、これといった物を見付ける事は出来なかった。

早苗は、野中に拉致されてから初めて空腹感を覚えた。ゝ何か食べなくてはゝ

急に動いたせいだろう、目眩が酷い。

玄關脇の、小さく仕切られた台所にほうり出されたように置かれた小型の冷蔵庫が有ったのに気が付いて、早苗は、中を見た。

缶酎ハイの缶が二本と口の開いた鰯の蒲焼きの缶詰、魚肉ソーセージが一本、ガランとした白い箱の中に有った。

ゝこれでも好い食べておこうゝ

魚肉ソーセージは、開封されていないので腐っていることはまず無いだろうと早苗は思い、それにかじりついた。ゝ美味しい！こんなに美味しい物だったんだゝ

空っぽの胃の中に入り込んだ魚肉ソーセージが引き金で食欲は一気に旺盛に成り、早苗は缶詰に手を伸ばした。

鼻を近付けるが、腐敗している様子は無い。

これも手づかみで口に放り込む。

缶酎ハイのプルトップ引き上げ、半分程を飲み、一息ついた。

早苗は、身体に体力が戻って来るのを感じていた。

その時だった。

早苗は、冷蔵庫と壁の隙間に、何か金属製の棒の様な物が覗いていることに気が付いた。

ゝ何？ゝ

引つ張り出して見ると、それは釘抜とドライバーだった。

「これで何とか成るかも」早苗は跳びはねたい衝動に駆られた。

「窓のベニヤ板を外せるかもしれない、いや絶対外す」

窓をもう一度見てみる、ベニヤ板は、ネジや釘で打ち付けられているのでは無く、多分金属にも使える接着剤で貼り付けている様だ。必死にドライバーを差し込める箇所を探す。幸運にも、丁寧な仕事をしていない。

あちこちにドライバーの先端を差し込める所は有る。

早苗は、釘抜きを金槌の替わりにしてドライバーを隙間深く差し込み、ベニヤ板を剥がしにかかる。

メリメリと云う音を発ててベニヤ板は窓枠から剥がされて行く。

分厚いベニヤ板が剥がされて曇りガラスが姿を現す。

窓ガラスの向こう側に広がっている見えない夜の闇の中から、赤く点滅する輝きは信号機のものだろうか、曇りガラスに滲む赤の明滅を眺めているうちに、一度は粉々に砕け散った心の内側から生きる事への強い思いが湧き出して来るのを早苗は感じていた。

「あんな男の為に自分の人生を駄目になんか出来ない」

もしも、あの男が今、此処へ戻って来ても、早苗は恐くは無かった。

手に、握りしめたドライバーをあの男の胸に突き立てても、ここから抜け出して見せると、独り心に誓う早苗だった。とともに、萎え切っていた心に気力も取り戻し始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5576f/>

向日葵のように

2010年10月15日20時20分発行